

藤縄謙三著

## 『歴史学の起源——ギリシア人と歴史』

大戸千之

本書は、古代ギリシア史のひろい時期、ひろい分野にわたって、新鮮な着想と明晰な思考により、すぐれた業績をあげてこられた著者が、既発表の論文十篇余りに補筆し、数篇の新稿を加えて編まれたもので、タイトルに見られるように、ギリシア人の歴史学や歴史思想を中心的主題とするが、叙事詩や抒情詩の世界、さらには政治思想や社会構造の問題などにも説き及んで、内容豊かな一書となっている。

以下簡単な内容の紹介と若干のコメントを試みるが、紙幅の関係もあり、新たに書き下された部分を重点的に取りあげていくことにしたい。既発表の論文は、いずれも高い評価を得てきたものであり、評者は今回読みかえして、あらためて多くのことを学んだのであるが、しかし、それらはすでにひろく読まれ、評価を確立しているともいえるので、いまは略説するにとどめたいと思う。便宜の措置としてお許しいただきたい。

本書は全体を三部に分け、計一四の諸章と付論から構成されている。

第一部は「史学史通観」。第一章「世界史像の源流」では、ヨーロッパ人の伝統的な世界史像、つまりオリエント諸国に始まり、ギリシア・ローマを経て、中世以後のヨーロッパに連なる歴史像の源流をたずね、アウグストゥス帝時代のローマ人ポンペイウス・トゥログスの『ヒストリアエ・フィリッピカエ』（後代読まれたのは三世紀頃の人であるユスティヌスによる要約だが）が果たした役割の重要性を指摘する。つづく第二章「ギリシアの世界史像——その形成とラテン語世界への伝達」では、そのトゥログスの史書がギリシアの歴史学の伝統に立つて生み出されたものであること、つまりギリシアの歴史学は、はやくから外の世界の動きに敏感で、しばしば外国勢力を関心の対象として取りあげてきたが、その成果がローマ史に結合され総合されることによって成立したのがトゥログスの史書であることを、歴史的にあとづける。著者の最も早い時期の仕事であるが、今日でもなお、このテーマについてはもとより、ひとつの視角からとらえたギリシア史学通史としても味読に値する。

しかしながら、ギリシアにおける歴史学の通史としては、第三章「歴史叙述の盛衰」が真正面から扱っており、第四章「伝記の成立」とともに「本書の主軸」（三六六頁）をなす。

第三章は吟唱詩人の時代にさかのぼって歴史学の発展のあとを辿り、前四世紀に始まる衰退の原因を考察し、さらにローマにお

けるギリシア歴史学の継承と、その破綻を論じたもので、鋭い指摘が随所に見られ、示唆に富む章となっている。例えばヘロドトスの歴史学について、「ヘロドトスは自らの眼で見ることを重視して、遠方まで旅行していながら、実際に見てしまえば、至極あたり前のことになるから、よほど珍しい事物でない限り、記述しなかったのである。そして代わりに……徹底的に人々の語ることを大切にした。かくて彼が書いたことは、全体として大部分が伝聞によるものであり、彼が確実に見た現実の世界のことは、ほとんど描き出さなかったのである。」(六〇頁)と書かれているのを読んで、評者は目を洗われる思いがした。ヘロドトスにおける「探究」の姿勢についての、根幹を衝いた指摘というべきであろう。

また、「ツキュディデスは因果関係の究明に熱心であったが、それは主として行為者の動機の究明であり、心理学的な説明である。……さらに客観的事実を記述するかの如くにして、実は人々の心理にまで立ち入って記述している場合も、もちろん非常に多い。……ツキュディデスとしては、かかる心理状態こそ、自分が記述しなければ、永久に不明になってしまうと考えたのであろう。……そしてツキュディデスの歴史の充実した生動する雰囲気は、何よりも、このような心理そして精神を描き出していることに起因している。」(六四―六五頁)なども、肯綮にあたる指摘の例として挙げることができる。

ただ、一、二のささやかな疑問を呈しておきたい。著者はギリシアにおける「歴史家」の先駆者」として吟唱詩人(アオイドス)に注目され、とりわけホメロスには歴史家的な精神というべ

きものが認められるとして、次の諸点をあげられる。原因追究の精神が明白に現われていること。公平な立場に立脚していること。時代意識を持っていること。(四七―五一頁) ところで著者のいわれる「歴史学」とは「個人の自発的な探究としての歴史」(四七頁)のことであるが、ホメロスの場合、まだ自ら研究することの重要性が明確には意識されていなかった、とも説かれている。(五二頁) そうだとすると、「先駆者」の意味について、いまだ説明を要するのではないか。程度の差や質を問わぬならば、原因・動機・理由を語るとか、公平であるとか、過去と現在の差を自覚するとかいったことは、物語・伝承の類でも備えうることなのだから。

いまひとつ、より詳しい解説を求めたく感じたのは、ポリュビオスの史書に関する部分である。著者によると、「彼の史書には相互に矛盾するような両面が現れている。すなわち、一方ではローマによる世界支配の成立という壮大かつ普遍的な主題を掲げながら、他面ではあからさまな個人的見解や体験の表明の書ともなっているのである。」そして「彼自身もときには登場して重要な役割を演じている。」のだが、その場合、「登場人物としての自分を一人称で記述」したりする。これはツキュディデスなどには絶対みられぬことで、「ポリュビオスには、意外にも公私の区別を忘れる傾向があったのだ」と結論されることになる。(八七―八八頁)

しかし、この説明には一考の余地がありはしないだろうか。歴史を書くものにとつて、実地経験を積み重ねることが必須の要件であることは、ポリュビオスがくりかえし力説するところであ

自分が歴史の大きな転換期に、その重要な局面で幾多の経験をへていることは、彼の自慢であり誇りであった。彼は政治の現実を知悉するものとして、経験を語り、後進を指導しようとした。そこには、著者も指摘されるように（八一頁）、ヘレニズム時代に顕著となる自意識の強化が認められよう。ただ、「あからざまな個人的見解や体験の表明の書」とか「公私の区別を忘れる傾向」とかの説明を読むと、ポリュビオスが自分の体験を不当に重視し強調しているとの印象が強く、「真面目で正確な史書」（八八頁）という評価と矛盾するとも受けとられる。ポリュビオスが、どこまで客観的で公正であったかは、より全体的に論じられるべきであるが、当面の問題に限っても、いますこし説明を補っていたいただきたいように思った。

第四章「伝記の成立」では、ギリシア・ローマにおいて伝記が生み出されてくる歴史が述べられる。伝記が高い地位を獲得しなかつたギリシアと、重要な役割を演じたローマとが対比的に語られている。

つづく第五章「ギリシア人の歴史観」では、ギリシア人の歴史観における「断絶」の意識が問題にされる。ギリシアでは、ミュケナイ時代の終りに諸王国の滅亡があり、人々に文化の断絶を印象づけた。アテナイのようなポリリスでは連続的な歴史意識が見られることもあるが、しかし、遠い過去に偉大な時代があつて、それが断絶して現在の時代が始まったとする見方も生まれる。このような「断絶」の意識は、日本・中国・ローマ・ヘブライの歴史思想と比較するとき、ギリシア人の歴史観の特徴のひとつであることが明らかになる、と著者はいわれる。

これは大変興味深い説であるが、納得しきれぬ点も残るように思う。國家が安定し、力に自信を持ちえた時期に、太古からの歴史の連続と未来に向けての発展が語られるのは、洋の東西を問わず見られることではなからうか。ギリシアでも、前五世紀のアテナイには、その例を見ることが出来る。他方、相互的侵略が盛んで、盛衰転変の激しかった春秋・戦国時代の中国では、文化のある形態が永久に歴史を貫徹していくという楽観的な孔子の思想は、容易に主流となりえなかつたのではなかつたらうか。都城の興亡を身近に眺めたヘブライ人の経験は、著者も述べておられるように、旧約聖書のあちこちにあらわされている。「断絶性」はギリシア民族の歴史観の特徴といえるのであろうか。

## 二

第二部「詩歌の時代——ポリリス成立の前後」第一章「歴史としてのホメロスの叙事詩」は、著者が「私のホメロス研究の要約」（三六六頁）といわれるもの。英雄たちの世界が、いかなる権力基盤・相互関係の上に立って展開しているかが簡潔に述べられる。第二章「ポリリスの成立」は、ポリリスの成立事情とその特質についての、ゆきとどいた考察である。

第三章「抒情詩と歴史」は、前七世紀から前五世紀初頭にかけて作られた抒情詩の翻訳と評釈で、評者はこの分野のことについて語る資格をまったく欠いているけれども、著者のわかりやすい訳と解説に導かれて、抒情詩の世界を楽しんだことを記しておきたい。

第四章「アルキロスについて——植民時代の詩人」は、著者

自身「本書中で最も充実した章」（三六六頁）と自負される一篇で、さすがに読みごたえがある。著者は、抒情詩人アルキロコス  
の思想・精神とその歴史的背景を、遺された詩の断片の克明な分  
析と、新発見の資料の参照によって、入念に考察する。彼の特質  
を、ギリシアの植民活動の時代の詩人である、という点に求める  
結論が、くつきりと描き出されていくさまは見事というほかない。  
ただ、これは著者が外遊される以前の仕事であり、「このよう  
な現地の状況を見た上で、アルキロコスを研究していたとすれば、  
どのような解釈になっていたであろうか。」（三六七頁）といわれ  
るのを読むと、むずかしいのを承知で再論を所望したくなるのが、  
正直な感想である。

第五章「ソロンの改革の背景——詩の分析を通じて」は、ソロ  
ンの詩の分析をつうじて、「改革の政治的社会的背景を明らかに  
し、さらにそれに対するソロンの立場を考察」（二三七頁）した  
もの。中心地付近つまり「平地」での貴族による土地兼併の進展  
と、地方村落における中堅農民の健在という対照的な状況を考え  
るべきこと、「ソロンにも民衆にも、それぞれある種の共同体的  
意識があり、両者は矛盾を含みつつも、共通する面があり、政治  
的共同体ポリスの形成へと志向していた」（二五七頁）ことが結  
論されている。

第六章「ペリクレスの生涯——悲劇時代の政治家」は、この  
「最も古典的な、大理石像のような人物」（二五九頁）を、現代  
人の眼から見つめなおした伝記である。

### 三

さて、第三部は「古典期散文の世界」と題するが、その第一章  
「ヘロドトスの信仰」では、世界を遍歴するなかで各地の聖所を  
訪問し、密儀に参入しながら得た知識が、ヘロドトスの思想形成  
に重要な意義を持ったこと、ノモスの相対性を深く知りながら、  
各民族の宗教的慣習を絶対視し、神々の不可知性を知りながら、  
宗教的世界の真実を追究した点に、ヘロドトスの特質を見るべき  
こと、などが語られる。

第二章「ツキユディデスの思想の変遷について」は、ツキユデ  
イデスの思想が、ペロポネソス戦争の時代を生きつつ歴史書を執  
筆する過程で変化していったこと、つまり、対象自体||祖国の偉  
大さに永遠の価値を認める立場から、不変の人間性をえぐり出す  
ことに価値を認める立場へ、すぐれた指導者を重視する立場から、  
一般民衆の動きに注意を集中する立場へ、という変化が認められ  
ることを説く。

第三章「プラトンとオデュッセウス」は、著者の最も新しい研  
究の成果である。いうまでもなくオデュッセウスは、ホメロスの  
叙事詩によって周知の英雄であるが、そこに描かれた彼の個性は、  
ホメロスがクローズ・アップしてみせたもう一人の英雄アキレウ  
スのそれと、きわめて対照的である。純粋ではあるが単純で、し  
ばしば激情にかられて突進するアキレウスと、智謀にすぐれ、沈  
着で柔軟だが平気で嘘をついたりもするオデュッセウス。著者は、  
この対照的な二人に対しギリシア人はどのような評価を下してい  
たか、と問うなかで、プラトンの場合に注目し、この哲学者が、

オデュッセウスという英雄に親近感を抱いていた一方、アキレウスには強い不満を持っており、それはソクラテスから継承された傾向であった、と述べる。

深くゆきとどいた思索をめぐらす哲学者が、自制心を失いがちなアキレウスよりも、忍耐と克己のオデュッセウスを支持するのは当然、と素朴に考えるむきもあるかもしれぬが、著者はひろく関連古典を検討しつつ、プラトンの立場について入念な考察を進めており、「ヒippiアス小篇」の評価とか、「第七書簡」の真偽論といった難問にも興味深いコメントを行なっている。

著者もいわれるように、「オデュッセウス型」と「アキレウス型」というのは、「普遍的な人間像の両極的な理想型だともいえる」(三二六頁)のであって、その点、かの「アポロンの」と「ディオニュソスの」という二類型と同様であるが、このような概念装置を用いることによって、ギリシア文化(あるいは文化一般)の性格を考えてみることの有効性は、誰しも認めるところであろう。さらに適用例をひろげて検討していくことが望まれる。

ただ、よく知られているように、ギリシアの神話・伝説のキャラクター(神々・英雄・人間すべてを含む)の取りあげられかた、性格づけは、きわめて多様であり自由である。「五世紀のギリシアでは、ホメロスの描いたオデュッセウス像が弱まり、代わってホメロス以外の伝説に基づいて、能弁で狡猾なオデュッセウス像を描き、これを批難するのが、むしろ普通になっていた。」(三三一頁。傍点引用者)というような説明が、まったく適切であるかどうか、不安を覚えぬでもない。著者のあげられる例についてみても、ソボクレスの場合、「アイアス」と「ピロクテテス」では

オデュッセウス像は同じでないし、多くの神々や英雄を人間のレヴェルにおろしてみせたエウリピデスの場合から、一般の通念をうかがうのはどうか、とも考えられる。

いかなる問題を考えようとするか、人に何を訴えようとするか、それぞれの意図に立って材料が選択され、処理が工夫される。そこからある人物についての新しいイメージがふくらんできたりする。その柔軟さ、多彩さは、ギリシア文化の大きな魅力のひとつである。「一般ギリシア人がこの両人物像に対して、どのような評価を下していたのか」(三二六頁。傍点引用者)とか「このようにオデュッセウスに対する批判の声の強かった時代に」(三三二頁。傍点引用者)といった言葉からは、両者の評価についての明らかかな傾向性が存在したという著者の判断が感じられるのだが、いましばらく、できるかぎり多数の事例を集め、それぞれについて、両英雄がどのような個性として思い描かれ、どのように評価されているか、そしてそれは、いかなる理由に根ざしているか、点検を重ねていく必要があるのではないだろうか。そうした点検のなかから、一般ギリシア人の考え方、あるいは時代の傾向といったことが浮かびあがってくるかもしれないが、しかし、おそらくはギリシア人の思考の多様性、つまりは文化としての豊饒性を確かめることになるのではないか、と評者は予想する。

さて最後に付録として「マルケリノスその他のツキユディデス伝」の訳注がある。根本史料によって伝記の実例を見ることの意味もさることながら、ここに見られるような、弁論術・文体論を重視する古代人の思考については、わが国ではなお十分紹介されているとはいえない。その意味でも、この付録が加えられたの

はよろこばしいことであつた。

四

高度の研究書であつて、しかも専門外の人間にもわかりやすく、読んで考える楽しみを与えてくれる書物は、昨今いよいよ少なくなつてきたように思う。研究の細分化・精緻化が進んでいくなかで、研究成果が公にされても、それを理解できるのは、特殊な関心を共有し、特殊な基礎知識をあらかじめ持っている人間に限られる、といったケースが、ますます増えている。とくに人文科学の場合、はじめから限られた読者のために、難解を承知で書かれる書物というのは、あつても恐らく少数で、おおかたの書物は、多数の人々に読まれることを願つて書かれるはずなのだが、現実には、読んで内容を諒解するのに苦痛を強いられることが多いのである。もちろん、その原因の一部が読者の側にあることは否定できないが、しかし、やはり著者の責任は大きいといわねばなら

ないであらう。

そのように考えてくるとき、本書のすぐれた点として、曖昧なところがなく、わかりやすいということの特記しておく必要があるように思う。著者のいわんとするところは常に明快で、曖昧さをのこさない。微細な議論のうちに踟躕せず、最も重要なことが簡潔に語られる。読むものにとっては、材料を巧みにさばいて、真に美味なところのみを供してもらふような悦びがある。

ともあれ本書は、ギリシア史学史について知ろうとする人々にとつてはもちろん、ひろくギリシア史、あるいはギリシア文化に関心を持つ人々にとつても、ながく必読の文献となるであらう。著者が到達された高みについて語るのに、評者の言葉が足らなかつたことを恐れつつ、あらためて著者に心からの敬意を表して、拙い一文を閉じることにした。

(力富書房 一九八三年八月刊)

A 5 三七二頁 三六〇〇円

(立命館大学教授)